

第1部 自然に遊び、育まれる子どもの世界

対 談

河合雅雄×福井勝義

(司会：松村圭一郎)

◆子どもから大人へ

松村 ありがとうございます。それでは残り時間いっぱいですね、二人の先生方にもう少し詳しくお話を伺いたいと思っています。実はここに座ってらっしゃる福井先生は昭和18年生まれで私の父親と同年であります。河合先生は大正13年生まれで81歳になられたと伺いまして、私の祖母と同年です。ここに三世代が並んでおります。これからの子供たちのことを考えるときにですね、私まだ独身ですが、これから親となる世代が未来をつくっていく子どもたちにどう向き合っていくかということが問われていくんだと思います。そういうことを念頭におきながら少しお話を伺っていきたいと思います。私自身もエチオピアの農村で文化人類学の調査を続けてまいりました。非常に印象的なのは子どもが小さいときは溺愛しているんですけども、5、6歳、それこそさきほど福井さんがおっしゃったような年齢から急に大人びてきて、家の仕事を大人と同じようにするようになります。牛の面倒を見たり、まきを集めたり、急に大人びてするようになるんですね。福井先生のお話の中にもありましたけれど、基本的な自然観というのは5、6歳でだいたい大人と同じになる、と。5、6歳くらいできちんと大人と同じような意識あるいは急に大人びて見えてくるようになる、この背景には何があるのかちょっと伺いたいんですけども。

福井 こないだ、またエチオピアに行っておりましてテントで過ごしてはいますね、普通乾季で

すから雨が降らないんですけども雨が降って、足は泥沼なんですけれども、そういうときの朝、子どもたちが訪ねてくるんですよ。3歳から6、7歳くらいの子どもが来るんですよ。ちょっと私はそのとき小鳥の観察というので彼らの鳥の捕らえ方を学ぼうと思っていました。2、3歳から5〜7歳くらいの子どもたちが6、7人で来るんですけどもみんな詳しいんですよ。わたしなんかどこにいるかわかんないんですけども、彼らはですね、あれはなんだ、あそこにいる、とかですね、それから鳥が2羽追っかけあっているんですよ。追っかけあっているのを見てあれは何で、この鳥は何で、どうしてあれは追っかけてるか、なんていうのを3、4歳の子どもが教えてくれるわけです。え、と思ってそこで私は当たり前のことかもしれませんが感じたのは、やっぱり子どもの伝達って言いますか、先輩からいろいろ学んでいくという流れのなかに、その習得過程というのがあるんじゃないか。さっきの河合先生のお話のなかに、弟さんの隼雄さんとどっちが習ったかわかりませんが、そういう先輩後輩のなかで学ぶこと伝えることというのが、私たちの社会のなかでファミコンくらいはあるかもしれませんが、というような思いがしました。

河合 松村さん、一つはね、人間と動物と非常に違うところは、人間はとにかく脳が発達した動物ですよ。そのためにこれだけ高い知能とか感情をもっているわけですけども、その脳の発達を見ますとね、赤ちゃんのときから急激に増えていって、だいたい6歳くらいで大人の脳の90%を

超えるんですよ。おおかた完成していくんですね。そのときまでに生きていく一番基本になる力、あるいは知識をやっぱり習得していくんだらうと思います。今こんな文明の世の中ですけど、長い人間の歴史のなかではとにかく自然とどう暮らすかということが生きていくための一番大きな知恵だったわけですよ。それを我々文明人になっても、6、7歳ごろまでに自然とどう付き合うかということ覚えていくんだと思うんですね。ですから今幼児教育というのが非常に大事にされますけれど、自然との付き合い、これは知識で覚えることも一つ大事、小さいときに体で覚えていく、そういうところが今抜けてるんですね。我々の子どものときはほっといたって子どもも多かったし、私が一番親によく言われた言葉は何かというと「外へでて遊んでこい」これだけなんです。私は6人兄弟ですから男ばかり6人ですからね、それが家の中で相撲をとったりあばれたりしたらもう、めちゃくちゃになりますなあ。「とにかく外で遊べー」って追い出されて。それはみんながそうだったんじゃないですか。

松村 実は私は親指運動世代でして、ファミコン世代でしてちょうど小学校の低学年のころにファミコンというのが発売されて、急激にこう外で遊ばなくなった世代の走りだと思っんです。で、はずかしながら私の川の最初の体験っていうのは、車がバンバン走っているような道の横のですね、どぶ川と、川ともいえない、先ほど先生が川とは言えないというような、コンクリで固められた用水路でごはんつぶをえさにアメリカザリガニ、これもアメリカに占領されている象徴みたいなものですが、アメリカザリガニをとったのが私の最初の幼稚園くらいの頃の記憶です。自然にたしかに触れさせてあげたいと思っても、今の子どもたちを取り巻く環境というのはなかなか身の回りに自然というのが少なくなってきたというのもひとつあるんだと思います。で、河合先生は兵庫県の教育委員会ですとか、人と自然の博物館で実際に今のお子さんたちと触れ合っていらっしますが、ボルネオの方でジャングルに子どもたちを連れて行くということをやっているそうなんです。

◆ジャングル体験

河合 ええ、それはね、自然と親しむことが子どもの教育に大事だっっていくら言ってもなかなかわかってもらえない。そうするとね、やっぱりほんとにそうですよ、ということをはちよつと皆さんに知らそうというのがあって、小学校6年から高等学校3年までの男女26人ですけども、彼らを連れて、ボルネオの本当にジャングルの中でジャングル体験やってるんです。そこにマレーシアの子どもが8人入るんですね。国際的な子どもグループを作ってジャングル体験をさせます。朝の5時に起きてバードウォッチングをやって、夜もジャングルの中を歩いて、結構ハードな暮らしで、みんなもつかなあと思っんですけれど、やっぱり子どもってのはすごいですね。今の子どもってほんとひ弱いからどうなるかと思っんですけどね、めきめきと元気出しますよ。それでね、僕はやっぱり子どもの野性の力が出てきたことを感じます。で、飛行機の都合もあって、8日間くらいしかできないんですけども、帰ってきてあとで親のアンケートを見ると、すべての親が子どもが変わったとこう書いてます。おおかたはたくましくなっった。それから非常によく話をするようになった、つまり面白い体験をしてくると、人間ってしゃべりたくなるんですよ。だから親がいろいろ言わなくっても子どもはしゃべりたくっしょうがない。それだけのものを持っってくる。子どもって言うのはほんとにいい力を持っている。私は向こうで一番感じたのは、何か知らんけど日本の子どもたちっていうのはよくわからん力で異常に抑えられてる、管理されてる、そういう気持ちを非常に強くしました。それが何かってことを考えたら、これまたみなさんのね、いろんなご意見も聞きたいんですけど、おそらく残念ながら今少子になっったということが一番。それから大変な物質文明が栄えてきたということ。それで教育熱心だ。こどもは非常に競争社会におかれてる。ずっと大人の目下にある。ずっと大人に目で見つめられてる。子どもってのはどうもそういう状況に置かれてると思っんです。我々の子どものときは「子どもだけの世界」があっったわけですよ。大人が何にも関与しない、それはつまり遊びの世界だし、ガキ大将のグループですよ

ね。今その子どもの世界がなくなった。なくなったということはどういうことかという、つまりね、子どもが持っているそういう子どもの世界を全部、大人の私らが今は全部取り上げてしまったと思うんです。川も取り上げた、道も取り上げた、子どもは今立つ瀬がないと思うんですね、そういうことを考えて、子どもにもういっぺん我々が取り上げたものをみんな戻してやろう、そういうことが大事なと思いますね。川もそう。川も私がかさき言ったように一つの象徴です。

◆親の世代を問い直す

福井 1年前ですけど、琵琶湖博物館で話すシンポジウムの機会がありまして、そのときに琵琶湖博物館の学芸員の方が地域の親と子どもたちの体験というので、川があそこ100くらいありますから、それぞれの川をですね、体験しながら、魚捕り、つかみ捕りというのでやられたんですね。それで親さんと2歳、3歳の子どももシンポジウムにでてましたけど、そのお母さんがおっしゃるには、50歳くらいだと思うんですけどね、お母さんもはじめて川に入って魚を捕る、60歳前後の人と50歳前後の人の間には農薬で川が汚染されて川を遠ざけた、そういう地域内で子どもを遊べといてもですね、なかなか機会というか難しいと思うので、そういうのを地域で作って、子どもと親がいっしょに遊ぶその過程でずっと、その学芸員の方は琵琶湖の川の何がどこにすんでいるか、というのを全部種類調査を併わせてなさってるんですね。そうするとまた次にその体験が継承されていく、と。今大きく親の世代でぶつ切りになっている。子ども子どもというけれど、もう親の世代でぶつ切りになっている、ということから問い直さないといけないように思うんですが。

河合 おっしゃるとおりでね、いまもう自然発生的に「子どもだけの世界」なんてできないんですね。だからやっぱり今の大人がいろんなことを工夫して、子どもたちの世界をつくってやらんといけないでしょうね。これは家庭であり、学校であり、地域であり、それからいろんな博物館なりが関わっていく必要があるでしょうね。まあ単に自然と遊べといてもそれだけではもう無理ですね。

◆先輩から後輩へ

福井 やっぱり、先輩・後輩のつながりのなかで危ないところも学んでいくわけですね。いきなりほうってしまうと事故ばかり目についてあれするんですけども、そういう継承の場を復活というか、再生するようなことがおそらく地域社会としての装置で必要なかなと思ったりしてるんですけども。

松村 福井先生は島根のご出身で確か川原って言うのは、よく子どもが遊ぶ場でそれこそ先輩後輩の厳しいいろんなことを教わった場だと以前伺ったことがあるのですが。

福井 それは二つありまして、一つは川で魚を捕る。私の自慢はいっしょにですね、両手でナマズをあげたってということで、これ難しいんですよ。一匹の魚を両手で掴まえるのはなんなくできるんですけども、片手で一匹、片手で一匹っていうのは、これはずっとやった成果だったと思うんですけども。もう一つは喧嘩してましたよね、そのとき川原で上(かみ)と下(しも)と分かれて喧嘩するんですけど、ほんと殴り合いの準備を普段からやって、けが人が出ないように殴るっていうのかな、というようなこともやったことがあって、川って言うのはほんと、自分たちの原風景っていうかですね、なにかあると川を思い出す。今の千曲川ってのはおそらくね、理由は千曲がってるから千曲川なのかわかりませんが、あの流れを毎日ごらんになっていらっしやったら、ほんと動脈、生きている動脈が自分のそばで息づいているような思いをなさって、ほんとうらやましくなって思ったんですけども。

河合 我々ね、子どものときはほんとよう喧嘩もしましたよ。ただまあ、喧嘩の時にはルールがあつてね、それこそ石で殴ったらいけないとかね。そういうことやったけど、アフリカの子どもたちよく喧嘩しますよね。

福井 ええ、しますよね。ただ、さきほどから何度もでてます先輩後輩のけじめがきちっとして、後輩は先輩に対して歯向かっていくってことは非常に厳しい掟になってですね、そういうしつけが子供同士の付き合いのなかで教わっていくって、育まれていくように思われますね。

河合 やっぱりあれですか、ガキ大将みたいな

のはおるんですか。

福井 ええ、いますね。

河合 いずれはリーダーですね。

福井 そうですね。聡明な知恵と、それからガキ大将と、それからワンパクというかなんとか強い技に優れているってやつもいるんですけれど。

◆子どもは群れる

松村 河合先生は、「子どもは群れる」って言葉がお好きだと本に書かれていますけど、それは、子供同士がそこで一緒になって遊ぶことに非常に意味があるというお考えですか。

河合 そうなんですよ、僕はサルの研究者ですけどね、サルだってやっぱり赤ちゃんから育っていくわけでしょう。あれも人間の遠縁の親類ですから、ちゃんとお母さんとおっぱいで育てていくのは他の動物より似ているですよ。親子の関係は非常に重要だけれども、それよりも重要なのはお母さんから離れて子供同士が遊ぶんですよ。これが子どもの成長のためには非常に重要なんですよ。だから子どもだけのグループがちゃんとできるんですよ。そして遊んでいます。遊び疲れたらお母さんのとこに帰ってきて、ということをやっているわけですね。だから、子どもたちが群れて遊ぶっていうのはいわば生物としてのね、高等な生物が育っていく上で一番大事なことだろうと思う。人間もやっぱりおんなじで、そんな難しいことを言わなくても昔は子どもは多かったから、「外で遊んでこーい」って、子どもだけのグループがちゃんとできたんですよ。今はそれがいないから作らなければいけないと私は思っているんですけどね。

松村 先ほど、お話のなかでもありましたけど、親が子どもばかり見ているという話で、確かに過保護に近いような状態があるのかなと思いましたけど。サルの世界だと子別れっていうのがあるそうですね。

河合 あのね、キツネとかあいう動物では割りにはっきり子別れがあるんです。お母さんが大事にしとったのに急に子どもにかみついて、「さあ、出て行け。お前はこれからひとりだー」って。ところが高等な動物、まあサルなんかになるとね、

そういうはっきりしたものはないんです。次第にこう、別れていく。だから何歳でってはっきり決まらない。それは人間と同じでね、親子の関係で決まる。けどもサルの種類により違いますけどね。例えばニホンザルの場合ですと、オスは必ず、少年期から親から離れてよく、子どもグループを作って遊ぶ。それからオスザルは青年期の初めになると、必ず群れを出ていくんです。そして群れを出ると一匹で暮らすから、ヒトリザルっていうんですけど、山の中を一匹でうろついて、一人で生きていく力をつけなきゃいけないんですね。大人になるとまた、群れにカムバックしてくる。このときはなかなかいれてもらえないんですよ。このときは非常に苦労して入るわけですが。ニホンザルの場合オスは大変です。とにかく群れから一回全部出て、生きる力をつけて、そしてまた群れへ戻る。大変ですね。

福井 私たち、子どもの頃は私、それこそ六男の末っ子でしたけれども、おまえなんかいらのすけだっていわれて、橋の下から拾ってきた子だって、さっさと出て行けって言われて。小学校の頃から散々聞かされて、そうか、生きていかんといかん、というようなことで育ってきたんですけど。

河合 出て行けって言われて、出て行きましたか。

福井 いやあ、出て行くところがないわけですよ。いわゆる大きくなって出て行かんといかんということですけど。さっきの話ですけど、中2まで群れてまして、喧嘩してて、加勢してるんですけど、中学の剣道の先生がお前ら何やってるんだと言って、喧嘩してますって言ったら、その翌年からそういうものがなくなって。都市化の波っていいですかですね、あのあたりからずいぶん、昭和33、4年、高度成長期あたりから、千曲川あたりは何年ぐらいから変わり目ってあったかわかりませんが、どうも30年代の高度成長期、それから農薬の浸透等が、私たちを自然から大きく切り離していったように思いますね。

◆内なる自然の破壊

松村 そこで河合先生は、子どものなかの内なる自然が破壊されているんじゃないか、ってお言

葉非常に印象的に読ませていただいたんですが、単に外の環境が壊されてっただけじゃなく、子どもの内側にある自然まで壊されてきたんだということでしょうか。

河合 そうですね。本来人間は思いやりとかね、人に親切にするとか、あるいはやさしくするとかそういういろんな気持ちを持っているんですよ。人間というのは600万年前に生まれてずっと長い歴史を持っているわけですが、大事なことは必ず集団をつくって暮らす、っていうのが人間の特徴になっているんですね。みんな知能の高いやつと一緒に暮らすっていったら、なかなか大変なんですよ。その間にみんないかに上手に暮らしていったらいいか、ということ人間は長い間に考えて、ちゃんとそれが遺伝子の中に組み込まれて、思いやりとか親切とかそういうものがちゃんとできていくわけです。そういうものを私は内なる自然っていつてるわけですね。長い進化の過程のなかで自然にできてきたわけ。それがこういう高度な文明社会になるといろいろな形で歪められたり、つぶされたり、うまく発達しなかったり、しているわけです。

松村 なるほど。

河合 だから小さいときに、福井さんの話じゃないけど6歳くらいまでに自然との付き合いをおぼえていくわけです。同じように一番基本的なことは小さいときにきちっと身につける。やっぱり一番大事なことは家庭だろうと思いますけど。

松村 エチオピアで実際に子どもたちを見ていて、さきほどおっしゃられたように自然に学んでいく、付き合いの作法とかそういうのをどういうふうに身につけていつているように見られますか。

福井 河合先生がおっしゃったように、群れで

遊べば、群れ遊びにも、付き合いの仕方っていうのは基本ですから、しつけを習得していく、それがまあ基本的に6歳くらいで、次の大人への過程を歩いていく、というんじゃないかなと思ったりもしてますが。

松村 今日のお二人のお話を聞いていますと、子どもたちを群れで、というか一緒に遊ばせる、しかも自然のなかで触れ合うような形で遊ぶ機会を親がいかに提供するか、そこであまり親がべったり見るのではなくて、子どもたちの、自分たちの世界のなかで遊ばせるということが非常に大切なんではないかなというふうに感じました。河合先生はサルの研究をずっとなさって、サル学をやられてこられたわけですが、ご本の中にも書かれていますように、サルの研究っていうのはサルのことを知るのではないんだ、と。人間のことが知りたいからなんだということが非常に印象深かったんですが、福井先生のやられている文化人類学っていうのも私自身もやってるんですが、遠いアフリカの、エチオピアの世界とか、そういうものをただ単に調べるというだけではなくてですね、その異なる文化、社会に生きる人を通して、我々自身を問い直すような学問だと思います。今回は、ナイル・エチオピア学会という聞きなれない学会が、この千曲市にお世話になっているわけですが、我々の経験がですね、少しでも千曲市のみなさまや、我々自身の糧になればと思います。しかも私のようなこれから子どもを育てていかなければならない親の世代がどうやってお二人の先生の今日話し合われたことを踏まえて子どもたちに向き合っていくかが問われているのではないかと思います。今日は河合先生、福井先生ありがとうございました。

(まつむら・けいいちろう／京都大学)